

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520322

研究課題名(和文) ヴィクトリア朝文芸における 信仰活性 の意味

研究課題名(英文) Art and Literature and the Revitalization of Christian Faith in the Victorian Era

## 研究代表者

向井 秀忠 (Mukai, Hidetada)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：70239458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ヴィクトリア朝期のイギリスにおいては、急速に蔓延していった功利主義的、合理主義的な価値観の影響を強く受け、社会全体が世俗化する方向に大きく流れたが、それに抗するかのよう、失われつつあった価値や秩序を回復するための試みが、各方面において社会啓蒙運動として興ってきた。キリスト教信仰においても同じように、信仰活性と呼ぶことができる動きが起こり、当時の社会や文化の諸相に実際的な影響を及ぼすようになった。本研究では、19世紀のイギリス文芸とキリスト教信仰の関係に注目し、ヴィクトリア朝期イギリスにおける信仰活性の諸展開が同時代の文芸創作活動に与えた影響を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study focused on the historical changes and movements of the revitalization of Christian faith mainly in the Victorian Era in order to investigate the effect on creative activities in literature and art from the Regency period onwards, specifically from the end of the 18th century to the beginning of the 20th century. By analyzing many novels of the period such as those by Jane Austen, Charles Dickens, Charlotte Bronte, and Thomas Hardy, as well as paintings and architecture of the period such as that of A. W. N. Pugin, we confirmed the power of changing society within literature and art and demonstrated how Victorian people tried to resist the trend in an era of secularization.

研究分野：英文学

キーワード：信仰活性 ハーディ ゴシック・リヴァイヴァル ブロンテ姉妹 ディケンズ 改宗小説 イングランド国教会 自伝

## 1. 研究開始当初の背景

イギリスの19世紀の大半を占めるヴィクトリア朝時代の社会は、「レッセ・フェール (laissez-faire)」、つまり「なすに任せよ」という言葉が象徴するような、功利主義や合理主義的価値観に牽引された世俗化が多くの方で進んでいく一方で、近代化が進む中で失われてしまった価値や秩序を回復する鍵をキリスト教信仰に見出そうとした、情熱的で多角的な社会啓発運動が興隆した。

この時代の宗教的運動としてまず思い浮かぶのは、エドワード・ブーヴェリー・ピュージー (Edward Bouverie Pusey) やジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman) らが先導したオックスフォード運動かもしれない。ただ、この時代の危機意識は広く人びとに共有されており、カトリック的要素の復活によって教会内の権威と教権の国家から独立回復を目指したイングランド国教会内のこの刷新運動以外にも、もっと日常的なレベルでも多くの活動が始まっていた。

ロンドンの織物商の店員であったジョージ・ウィリアムズ (George Williams) は、職場の仲間を集めて祈禱会を開くが、これが長じたものとして、1844年に「キリスト教青年会 (Young Men's Christian Association、通称 YMCA)」が結成されることになる。また、団体旅行を企画し、現在の旅行業のビジネス・モデルを確立することになったトマス・クック (Thomas Cook) がそもそも企画したのは、禁酒主義者たちの集まりに参加する570名の人びとを団体で運ぶことであった。1841年のことである。あるいは、ロンドンの貧民地区の人びとが飲酒や賭博などの悪徳に耽り、教会から遠ざかっていることを問題視したウィリアム・ブース夫妻 (William and Catherine Mumford Booth) は、1865年に救世軍 (The Salvation Army) の活動を始めた。

以上、述べてきたように、ヴィクトリア朝時代に興った社会改良を志向する活動の多くの背景には、キリスト教的価値観を人びとに取り戻そうとする意識が強く働いていたことがわかる。リチャード・D・オールティック (Richard D. Altick) は、キリスト教信仰への意識が特に高まる時期として12世紀、17世紀、そして19世紀を挙げているが、ヴィクトリア朝時代において、キリスト教的価値観に基づいた社会改良の動き、つまり

信仰活性と呼べる諸展開が興ったことを踏まえ、そのような志向性が必然的に当時のイギリスの社会や文化の諸相に大きく実際的な影響を及ぼしていたことを検討することを通してこの時代の特質を見極めることができると考え、本題に取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

本研究においては、これまでに十分に研究されてこなかった19世紀ヴィクトリア朝時代のイギリスの文学・芸術活動とキリスト教信仰との関係に着目し、この時代の信

仰活性の諸展開が同時代の文学・芸術活動に与えた影響について明らかにすることを目的としている。具体的には、(1) 主題としての信仰、(2) 信仰的使命としての文学・芸術創作活動、(3) 着想としての聖書の3点について考察することで、ヴィクトリア朝時代の信仰活性の試みがこの時代の文学・芸術の発展に与えた意味について明らかにすることができると思った。

これまでの研究では、文学あるいは芸術のいずれかの立場からヴィクトリア朝時代のキリスト教信仰との関わりについて論じたものはあったが、文学と芸術という異なる創作活動の両面から信仰活性の動きとの関連を考察したものはなかった。本研究はこの点で先例のない試みであった。

「文学」の分野においては、主として小説を扱うこととした。ヴィクトリア朝時代の文学ジャンルを概観したときに、この時代においては小説が最も信仰活性と社会改良の関連を考えるのに適していると思われたからである。18世紀に中産階級の台頭とともに生まれたとされるジャンルである小説、特にヴィクトリア朝時代に描かれた作品の多くは、その誕生の経緯を反映しており、信仰活性の動きを探るには相応しいという理由から、文学の中でも特に「小説」を中心的に扱うことにした。

また、「芸術」の分野においては、当初主として絵画を扱うことにしていたが、建築デザインの領域においてもこの時代の信仰の問題をめぐる多様な立場を読み取ることができることから、考察の対象に含めることにした。例えば、詩人・小説家であるトマス・ハーディ (Thomas Hardy) は、キリスト教信仰に関連する自らの立場や宗教観を文学作品の中で積極的に表明したが、彼はその旺盛な文学的活動の傍ら、教会建築の修復を専門とする建築家としての関心をもち続けた人物であった。そうしたことから本研究課題では、ハーディの文学作品と教会建築修復家としての活動、そしてとりわけ彼の文学作品の中で描かれる建築物の表象に、彼の信仰観、宗教観がいかんにか表明されることになったのか、という問題を重要な考察テーマとして扱うことになった。

以上、述べてきたように、本研究の目的としては、ヴィクトリア朝時代のイギリスで興った信仰活性の動きについて、小説を中心とする文学と、絵画と建築を中心とする芸術の両分野から分析を行うことで、「信仰」の問題が当時の人びとによってどのように捉えられ、そして理解されていたのかについて理解することであった。そのことによって、様々な点で独特な表情を見せるヴィクトリア朝時代を、多角的かつ立体的に見直す機会となった。

## 3. 研究の方法

先にも述べた本研究課題を構成する3つ

の視点についての考察を行うための研究の方法として、まず、国内外の研究機関における第一次資料および第二次資料を中心とする資料収集を行った。

次に、研究代表者および研究分担者が同じ大学の同じ学部学科に所属している利点を活かし、共同研究としての統一性と一体性を失わないため、小規模な研究報告の機会を頻繁に設けるなどの工夫を行うこととした。それらを通して、集めた資料の分析と検討、それに基づき、研究代表者と研究分担者間での成果を報告し合い、学会発表や研究論文としてその成果をまとめることとした。

まず、第一次資料、第二次資料の収集を進め、それらの資料の検討を行った。資料収集の際には、研究代表者（向井）が文学を、研究分担者（近藤）が芸術を主として担当し、いずれかではなく、双方にまたがる傾向を読み解くことを心掛けた。資料収集の対象としたのは、第一次資料として、小説、自伝、絵画、建築などの直接的に分析の対象となるもののみならず、作家、芸術家、建築家らの信仰観や社会的関心などについても詳細な検討を行うために、これまで十分に検討されることが少なかった未刊行の草稿、書簡、日記なども積極的に集めることとした。

第一次資料の収集には、国内の国立国会図書館や複数の大学付属図書館のほか、ヴィクトリア朝イギリス文学と諸芸術に関する研究拠点として知られているイギリスの諸研究機関、例えば、大英図書館（The British Library）、ケンブリッジ大学図書館（Cambridge University Library）、英国公文書館（The National Archives, Kew）、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館内国立芸術図書館（National Art Library, Victoria and Albert Museum）などにおいて行った。これらの機関に所蔵されているアーカイヴ資料については、現地での調査を行った上、可能な範囲内で複写物として入手し、未刊行の草稿、書簡、日記等については写真撮影を行うなどした。

資料の収集および分析後、研究代表者（向井）と研究分担者（近藤）との間で収集した資料やその分析結果を報告し合うことで情報の共有を行った。それらを元に、国内外の学会や研究会などでの研究報告の発表および研究論文の執筆などを行うことを通して、本研究の成果発表を行うことに努めた。

#### 4. 研究成果

本研究課題はイギリスの19世紀ヴィクトリア朝時代の文学および芸術活動においてどのような信仰活性の動きが見出せるのか探ることを主たるテーマとしているが、その研究成果について、以下にまとめた通り、研究発表および研究論文の執筆を通して年度ごとに行った。

平成24年度には、近代社会に失われていたキリスト教信仰における「秩序」の再

興を目指した風潮が生まれた展開について、文学および芸術を専門とするそれぞれの立場から検討を行った。具体的には、信仰活性についての考察を行う取り掛かりとして、「主題としての信仰」というテーマを設定した。

ヴィクトリア朝時代のイングランド国教会のあり方に人びとが不満を抱いていた時代風潮の現れとして、文学（主として小説）の分野においては、オックスフォード運動を主導したジョン・ヘンリー・ニューマンに代表される作家自身の信仰生活を克明に記した自伝的著作物が相次いで発表されたほか、ニューマンによる『失ったもの、得られたもの』（1848年）やこの時代の最大のベストセラーとなったウォード夫人（Mrs. Ward）による『ロバート・エルズミア（Robert Elsmere）』（1888年）など、主人公のカトリックへの改宗をテーマにした小説が数多く発表された。また、芸術の分野においても、絵画では、ウィリアム・ダイス（William Dyce）やエドワード・バーン＝ジョーンズ（Sir Edward Coley Burne-Jones）らの画家たちによって、キリスト教信仰を本質的主题とする絵画作品がいくつも描かれた。建築の分野においても、A・W・N・ピュージン（Augustus Welby Northmore Pugin）やG・E・ストリート（George Edmund Street）らの建築家たちが、自らのキリスト教信仰を文章と建築作品によって表明している。

このように、ヴィクトリア朝時代には、聖職者、作家、画家、建築家などの分野を問わず、多くの文化人が、近代化が進む同時代に対してある種の不安感を抱き、それをキリスト教信仰によって解消しようとしたことがわかる。そのような信仰を希求する意志に源を発する動向に着目しながら、この時代に生み出されたキリスト教信仰を主題とした諸作品の分析を通し、ヴィクトリア朝時代の小説、絵画、建築に特有の芸術文化における信仰の表現のあり方を考察した。

研究代表者（向井）は、日本オースティン協会関東支部研究会第7回例会において、「啓蒙と読書、そして信仰」という標題で、イギリスの摂政期の小説家であるジェイン・オースティン（Jane Austen）の作品『ノーサンガー・アベイ（Northanger Abbey）』（1818）と同時代のベストセラー小説であったウォルター・スコット（Sir Walter Scott）の『ウェイヴァリー（Waverley）』（1814）を比較することで、ヨーロッパを席卷していた啓蒙主義思想のイギリス小説への影響について、「読書」と「信仰」をキーワードに考察した成果を発表した。また、研究論文として、研究代表者を取りまとめを務めた日本英文学会第82回全国大会でのシンポジウム企画「ヴィクトリア朝の自伝を読む」において報告した、ジョン・ヘンリー・ニューマンの『アポロギア 我が宗教的見解の歴史（Apologia Pro Vita Sua）』（1864年）についての原稿を

もとに、この時代の宗教的雰囲気とイングランド国教会の重鎮をカトリックへと改宗させていった経緯について論じた。

研究分担者（近藤）は、国際学会で二度の研究発表を行っている。まず平成 24 年夏に北米ヴィクトリア朝研究学会（North American Victorian Studies Association）において、ヴィクトリア朝時代に活動した中世主義の芸術家たちの中に、中世キリスト教社会を理想視し修道院での共同生活を範とした芸術創造のための集団生活を組織する動きが興ったことに注目した発表を行った。続いて平成 25 年 3 月にはヴィクトリア朝文化に関する学際的研究を行う学会（Interdisciplinary Nineteenth-Century Studies Conference）において、ヴィクトリア朝期イギリスにおいて 信仰活性 の芸術的表現を追求した画家、建築家たちが直面していた世俗的現実 「競争」と「競合」の意識に支配された社会 に注目した発表を行った。

以上の研究を通して、「主題としての 信仰」というテーマで求めていた課題の基礎固めを行うことができた。当年度の研究を継続するとともに、次年度の課題として、「信仰的使命としての文学・芸術創作活動」という第二の視点を設定した。具体的には、小説、芸術、建築などの創作活動において、創作者たちがキリスト教信仰に基づく使命をどのようにとらえ、自ら位置付けていたのかについて、この時代に旺盛な創作活動を行った（あるいは、行おうとした）作家や芸術家たちに注目し、どのようにキリスト教信仰に基づく倫理観や人生態度の啓発などを目指したのかを考察した。

平成 25 年度においては、それぞれの研究を進めながら、小説を主とする文学の分野を担当する研究代表者（向井）と芸術・建築の分野を担当する研究分担者（近藤）との研究の方向性の統一を図る試みとして、学会でシンポジウムを企画し、共同で研究成果の発表を行うこととした。これは、ヴィクトリア朝時代のイギリスで興った 信仰活性 の動きについて、具体的にひとりの人物の創作活動を取り上げ、文学および芸術・建築の双方から分析を行うことで、どのようにこの時代の人びとが 信仰 の問題を捉えていたのかをより明白に理解することを目的とした。

具体的には、イギリスの詩人・小説家であるトマス・ハーディに焦点を当てることにした。彼は、作家としての活動を始める前は、教会修復を専門とする建築家としての仕事に携わっていた。そこで、教会建築の専門知識を兼ね備えたユニークな作家として捉え直すことで、ハーディの文学と芸術における諸活動に、本研究のテーマであるヴィクトリア朝時代のイギリスの文学・芸術における

信仰活性 の流れの影響を読み解こうとしたのである。こうして、ハーディ個人の研究であり、同時に、彼が生きた時代時代を概観

する研究となるように心掛けた。

このようにして、それぞれが準備し、その後、二人の成果を突き合わせた研究成果について、日本ハーディ協会第 56 回大会のシンポジウム企画「トマス・ハーディにおけるヴィクトリアニズムと 信仰」を企画し、その中でそれぞれが研究報告を行った。本シンポジウムでは、これまで日本では反キリスト教的作家とだけ単純に理解されることが多かったハーディの信仰に対する姿勢について小説家および建築家としての両面から見直す試みを通し、彼もまたヴィクトリア朝時代の 信仰活性 の潮流と強い接点を持ちながら創作活動を行っていたことを明らかにした。

ハーディは、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）の進化論やアルトゥール・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）の思想などに影響を受け、とりわけ後期の作品（『ダーバヴィル家のテス（*Tess of the d'Urberville*）』（1891 年）と『日陰者ジュード（*Jude the Obscure*）』（1896 年）においてはキリスト教に対する強い批判がはっきりと表明されていると理解されてきたが、19 世紀中頃から 20 世紀初頭にかけてイギリスのキリスト教会に興った様々な信仰復興運動とその周辺で展開された文芸運動に注目すると、ハーディは、生涯を通じて、実はキリスト教信仰と密接な結び付きを保ちながら執筆活動を行っていたことがわかってきた。

小説史と建築史の双方向から 信仰活性 をキーワードにハーディの後期二作品を論じたことで、それぞれが次のことを明白にした。研究代表者（向井）は、ヴィクトリア朝時代は科学的発想が進歩したことから宗教的懐疑が深まった時代であるが、そのことは逆説的に信仰を真摯に希求する傾向を強めた。ハーディの二作品についても、これまで一般的に受け止められてきたような単純なキリスト教信仰に対する批判と解釈するのではなく、実際には形骸化した当時のイングランド国教会の体制に対する批判であったことを指摘した。研究分担者（近藤）は、ハーディの同時代の建築家たちとの交流関係に注目し、彼がキリスト教信仰に基づいた中世復興を志すゴシック・リヴァイヴァリストであったこと、そして彼自身が生涯を通してキリスト教への信仰を失っていなかったことを、主として教会建築に関してハーディが残した文章から読み解いた。

また、研究代表者（向井）は、ヴィクトリア朝時代に先行するジェイン・オースティンに着目し、イギリスにおけるキリスト教信仰の世俗化の問題に関する研究発表を二回行った。18 世紀から 19 世紀にかけての宗教・道徳・文学を総括的に問い直すことを目指した、日本英文学会第 85 回全国大会のシンポジウム「啓蒙の変遷」を企画し、オースティンが描く牧師像にはヨーロッパを席卷して

いた啓蒙思想の影響が強いことを指摘する研究報告を行った。また、日本オースティン協会第 8 回大会におけるシンポジウム「200 年後の *Pride and Prejudice*」にパネリストとして参加し、ヴィクトリア朝時代にオースティンの諸作品の人気の落ちたことの原因として、啓蒙主義の影響によって世俗化された宗教観で作品世界を作り上げたことを指摘した。また、身内によって書かれたオースティンの伝記は、彼女も「宗教的な素養を持った小説家」として見直すことを志向している点から、ここにもヴィクトリア朝時代の信仰活性の動きの一端を見出した。

研究課題の 2 年目においては、その主たるテーマであった「信仰的使命としての文学・芸術創作活動」の一端を、特に詩人・小説家であり建築家でもあったハーディの創作姿勢から探り出したことが大きな成果であったと言える。イギリスのこの時期を代表する作家でもあるハーディもまた、「キリスト教の信仰および教会を生涯に渡って重要なテーマとして描き続けていたことの検討を通して、イギリスのヴィクトリア朝時代における信仰活性の潮流の一端を、文学および芸術の双方向から掘り起こすことができた。

平成 26 年度には、小説を中心とする文学において、19 世紀初頭の摂政期からヴィクトリア朝時代、そして 20 世紀初頭に至る時代の流れの中で、芸術の分野では、近代のイギリスの芸術文化において、信仰活性の問題がどのように扱われているかについて考察した。

具体的な研究成果として、研究代表者（向井）は、日本オースティン協会第 8 回大会において、ジェイン・オースティンの作品の中でも特に宗教的要素が強いとされている『マンスフィールド・パーク (*Mansfield Park*)』(1814 年)を取り上げ、当時の社会において世俗化するキリスト教信仰に抗するオースティンの試みについて分析したことに加え、南米のチリの作家ホセ・ドノソ (*José Donoso*) が『マンスフィールド・パーク』を下敷きに書いた小説『別荘 (*Casa de campo*)』(1978 年)と比較しながら論じることで、逆転写的にオースティンの時代の信仰活性の動きの特徴を探る発表を行った。また、日本キリスト教文学会第 428 回月例研究会において、20 世紀イギリスのカトリック作家であるアントニア・ホワイト (*Antonia White*) のイングランド国教会からカトリックへの改宗をモチーフにした『五月の霜 (*Frost in May*)』(1933 年)について、前時代のヴィクトリア朝時代の信仰活性の動きと比較しながら論じた研究発表を行い、その内容を論文にまとめたものを公刊した。

研究分担者（近藤）は、東北学院大学キリスト教文化研究所が主催した第 55 回学術講演会に招待され、近代イギリスにおける芸術活動において、キリスト教が主題としてどの

ように扱われているのかについての講演を行った。

これらの研究を通して、ヴィクトリア朝時代の信仰活性の動きが、同時代にとどまらず、その前後の時代に対しても大きな影響を持ち得ていることを改めて確認することができた。

また、本研究課題の第三のテーマである「着想としての聖書」について、資料収集を中心に準備を行った。

本研究課題の最終年度となる平成 27 年度においては、文学における信仰活性の動きについては、小説において「宣教 (ミッション)」がどのように描かれているのかを中心に、19 世紀のイギリスにおける動向について特に注目して調査・分析を行った。また、芸術においては、近代イギリスの芸術文化において、どのように信仰活性の動きが現れているのかについて検討を行った。

具体的には、研究代表者（向井）は、19 世紀の小説家・詩人であるシャーロット・ブロンテ (*Charlotte Brontë*) の『ジェイン・エア (*Jane Eyre*)』(1847 年)を取り上げ、教区牧師セント・ジョン・リヴァーズがインドでの宣教を自分の人生の最終目的と考え、それに向かって邁進する姿から伺える、当時のイギリス社会における宣教活動 (mission) の意味合いについて論じた論文にまとめ、2016 年 7 月刊行予定の研究書『帝国と文化 (仮)』に寄稿した。研究分担者（近藤）は、トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における中世建築および古典主義建築についての描写が、ヴィクトリア朝期イギリスに興った「キリスト教的ゴシック」vs. 「世俗的古典主義」という二つの様式観の対立構図 様式論争 を暗示する「装置」としての役割を有していたことに注目した発表を、北米ヴィクトリア研究学会 (*North American Victorian Studies Association*) において行った。この発表では、ハーディが最新の建築事情に関する知識を文学的創作活動に具体的に用いることで、登場人物のキリスト教信仰上の立場や苦悩、さらには信仰活性と世俗化が共存した当時のイギリス社会を表現した可能性についても指摘した。この発表は、その後加筆、編集のうえ論文にまとめている。

本研究課題の 4 年間を通して、19 世紀イギリスのヴィクトリア朝時代の社会において、信仰活性と表現し得る状況があったことを確認し、同時代の文学、芸術、建築がそこに積極的に関わりを有していたことを論証することができた。共同研究を行ったことで、文学と芸術という専門分野が異なる視点からそれぞれが取り組んだ課題を統合させ、研究に有機的なつながりを持たせることができた。ヴィクトリア朝時代については、これまでも功利主義や合理主義の側面などを強調しながら理解されてきたが、今回、これまでに十分には注目されてこなかったもうひとつの重要な側面、つまり功利主義や合理主

義などの当時の時代風潮とは真っ向から対立するキリスト教信仰の活性という動きを指摘したことで、新しい視点からヴィクトリア朝時代の社会的な有り様を示すことができた。作家、芸術家、建築家が創作の意欲と着想とを与えた信仰の問題を、個人的なものにとどまらず、多くの人びとに共有された信仰活性という大きな社会現象として複合的に理解するべきであることを提示できたのが大きな成果であった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計5件)

Ariyuki Kondo, The Battle of the Styles in Thomas Hardy's *Jude the Obscure*: The "perpendicular, God-seeking" Gothicism vs. the "horizontally-extended, secular" Classicism, 『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第1号、2016年、pp. 77-89. 査読無

向井 秀忠, 『Antonia White の *Frost in May* (1933) を読む』, *Ferris Research Papers*, Vol. 5, 2015, pp. 127-44. 査読無

近藤 存志, 『近代イギリス芸術文化における主題としてのキリスト教』, 『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第33号、2015年、pp. 13-41. 査読無

向井 秀忠, 『ヴィクトリア時代から眺めたオースティン 『高慢と偏見』における道徳意識と信仰』, *Ferris Research Papers*, Vol. 4, 2014, pp. 199-215. 査読無

向井 秀忠, 『John Henry Newman の *Apologia Pro Vita Sua* を読む』, *Ferris Research Papers*, Vol. 3, 2013, pp. 151-64. 査読無

##### [学会発表](計10件)

Ariyuki Kondo, Hardy's Architectural World: The Battle of the Styles in *Jude the Obscure*, North American Victorian Studies Association, 2015 NAVSA annual conference: "Victorians in the World", July 9th - 12th, 2015, Hilton Hawaiian Village, Honolulu, Hawaii, USA.

向井 秀忠, 『南米の『マンズフィールド・パーク』ホセ・ドノソの『別荘』を読む』, 日本オースティン協会第8回大会、2014年6月28日、西南学院大学。

近藤 存志, 『近代イギリス芸術文化における主題としてのキリスト教』, 東北学院大学キリスト教文化研究所第55回学術講演会、東北学院大学キリスト教文化研究所、2014年6月14日。

向井 秀忠, 『『テス』と『ジュード』における信仰の問題』, 日本ハーディ協会第56回大会シンポジウム、2013年10月26日、茨城キリスト教大学。

近藤 存志, 『建築家ハーディのゴシック・リヴァイヴァリスト人脈と協会建築観』, 日本ハーディ協会第56回大会シンポジウム、2013年10月26日、茨城キリスト教大学。

向井 秀忠, 『『高慢と偏見』に過剰なことで欠けていること ヴィクトリア時代から眺めたオースティン』, 日本オースティン協会第7回大会、2013年6月30日、関西大学。

向井 秀忠, 『撰政期の啓蒙の受容-Jane Austen の描く理想の聖職者像の議論を中心に』, 日本英文学会第85回大会シンポジウム、2013年5月25日、東北大学。

向井 秀忠, 『啓蒙と読書、そして信仰-オースティンの『ノーサンガー・アベイ』とスコットの『ウェイヴァリー』を読む』, 日本オースティン協会関東支部研究会第7回例会、2013年3月23日、青山学院大学。

Ariyuki Kondo, The Carnival of Competition: Between Hope and Despair in Nineteenth-Century British Art and Architecture, The 2013 Interdisciplinary Nineteenth-Century Studies Conference: "Leisure, Enjoyment, and Fun", March 14-17 2013, University of Virginia, Charlottesville, Virginia, USA.

Ariyuki Kondo, Luxury is the Enemy of Art: A Victorian Network of Medievalist Artists and the Ideal of a Simple Life of Retreat, 2012 NAVSA annual conference: "Victorian Networks", September 27th - 30th, 2012, University of Wisconsin-Madison, Madison, Wisconsin, USA.

##### [図書](計1件)

向井 秀忠, 『然り、われ速やかに到らん! - 『ジェイン・エア』における宣教と帝国主義』, 『帝国と文化』, 春風社、2016(予定) pp. 338-355.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

向井 秀忠 (MUKAI, Hidetada)  
フェリス女学院大学・文学部英語英米文学科・教授  
研究者番号: 70239458

##### (2) 研究分担者

近藤 存志 (KONDO, Ariyuki)  
フェリス女学院大学・文学部英語英米文学科・教授  
研究者番号: 00323288